

「もとはこちら」のお話し

No.75 今月のテーマ

あなたが 被害者になった時



講義中の平井謙次先生

自分から 自分で 自分を 説教出来る様になれば しめたもの

(平井謙次作 日めくり カレンダーより)

北原ゆり筆

「自分は絶対に、被害者などにはならない」と豪語できる人は、ただの一人としていないと思います。
またこれと反対に、「自分は絶対に加害者にもならない」と言い切る人も、この世にはいない筈です。

当然、弱肉強食の自然の世界にも、被害者と加害者があります。
自然の世界を紹介するドキュメント番組などをみれば、みる視点によつて、被害者と加害者は入れ変わります。

その番組が、餌となる小動物の立場に立って作られている場合は、敵から追われた彼または彼女が、命からがら逃げおおせた時は、心から安堵し、ほっと胸をなでおろすわけです。

しかしその反対の立場から作られた番組、即ち、おなかを空かせた子を持つ母親が、必死で餌となる動物を追いかけ、ようやく成功した時などは、母親やその子供の事を思って、本当にほっとするわけです。

自然の循環の中で生きる事を義務付けられている私達は、加害者であると同時に、常に被害者でもあるのです。

しかし、ではそういう自然界の動物たちと違って、私達人間同士の場合はどういふ事になるのでしょうか。

例えば、何らかの問題を抱えている知人や友人から相談といふか愚痴といふか、そういう話を聞かされた場合、私達はえてして相談者に同調、同情して、その場にはいない人の事を加害者と決め付け、相談者の気持ちに沿う様な立場をとる事が多いのではないのでしょうか。

さてでは、誰の目から見てもはつきりとした被害者と加害者がいるという様な場合、「もとはこちら」という自然の摂理の中でその争い事を解決しようとする場合は、どういふ事になるでしょうか。

以下は、ある日の勉強会での平井先生のお話しです。

~~~~~

### 離婚の原因は、明らかに夫の側にある

最近、知人夫妻が離婚をしたという噂を聞いたので、時間をやりくりして、その妻の方に会いました。

聞けば幼い子供二人を引き取り、生活保護を受けながら働いているという事です。

離婚の直接の原因は、夫が他所に女を作ったということでした。そしてその夫はある団体に所属しており、長となる人から<sup>ちつきや</sup>蟄居を命じられ、今は国内にはおらず、どこかの国に行っているとのことでした。

妻の話は夫への怒りと愚痴に終始し、離婚という形になった事の正当性を私に向かってとうとうと述べ続けました。

そこで私は彼女に対し、なぜ夫が、君という妻がおりながら、よそに女を作ったと思うかと問いかけました。

そして続けて、自分が妻として女として、そして二人の子供の親として、完全無欠な妻であり女であり、そして母であったと心底思うかと問いました。

心を静めて考えてみれば、いかに今までの自分が至らなくて不完全な存在であったかが分かる筈です。

それなのにその至らない自分の事を棚に上げ、今また二人の幼い子供を、片親のない子供にするという大きな過ちを犯そうとしているではないか。その事ひとつを取ってみても、如何に自分が母親としても至らなかつたかということが分かる筈だと、私は言いました。



私も知っています、確かに彼女の夫は人一倍の女好きです。そういう夫が君と別れ、また別の人と結婚などして新しく子供を作り、そこでまた上手くいかなかったからといって簡単に離婚などをしたら、そして、これからもそういう事を何度も繰り返すとすれば、君のような被害者が、そして君の子供達のような被害者が、これからもどんどん増え続ける事になる筈である。

そしてそういう被害者を増やし続ける元になっているのは、ひとえに君のその至らなさにある。

夫が不始末をしでかした時、相手の女の人を責めるなど、言語道断であつて、その女の人も実は君の夫の被害者なのである。

そういう被害者を次々と作り続ける夫は加害者であり、自分の夫を加害者にしてしまった君の責任を、君は一体どういふふうに取りつものりなのか。

### 加害者の妻としての立場

例えば、自分の子供が不始末をしでかしたとしたら、親はどうするだろうか。

当然相手の所にお詫びに行く筈である。

それと全く同じことで、夫が不始末をしでかしたら、妻は相手の所に向いてお詫びを申し述べ、そういう不始末をした夫の事を詫びると共に、妻としての自分の至らなさを詫びて、許しを請うというのが筋ではないか。

そして私は、「しっかりと反省をして、二度とこういう事を繰り返さないように、今までよりももっと、もっと素晴らしい妻に、素晴らしい女に、素晴らしい母になる様に努力をするから」と言って、夫に復縁を求めるようにと諭したのです。



話のあと、ざっと一時間半近く、私達は黙ったまま向かい合って座っていました。やがて彼女は涙をぼろぼろとこぼし始め、「これから夫がいるという国へのビザを申請し、謝りに行く」と言いました。

私は「くれぐれも夫には頭を下げさせないように」と言いました。

そして、被害者になった方が謝るのだと、繰り返し言いました。それは夫が詫びを入れた場合は、折角復縁ができたとしても、長続きしない事が多いからです。

腐っても鯛という言葉もあるように、どんな腐った男でも、男には男としてのプライドがあるのだから、そのプライドを捨てさせるなど助言したのです。

そのうえで、「夫への対応は自分に任せておけ。殴り飛ばして男の性根を叩きなおしてやる」と彼女に話し、これ

で妻への一通りの助言は終わりとなりました。

どんな場合であっても、また誰にとつてそうですが、自分が被害者になった時には、その結果を招いた原因は全て自分にあるという事を悟らなければなりません。

自分が被害者になったという事は、相手が加害者になったという事です。相手を加害者というような立場に立たせてしまった自分の至らなさに気付き、その事に対して心から詫びる事です。

重ねて言いますが、詫びるのは、過去の自分の行動や考え方の至らなさに対してであって、至らない相手に向かつて詫びることではありません。そして自分の至らなさを正しく詫びることのできる人は、詫びられた人よりも、何倍も立派な人なのです。

正しく反省し詫びる事によって、自分自身が変わることが出来、そのできた分だけ、必ず今までも素晴らしい人生が開けてくるのです。

相手を責める人は、相手の非ばかりに目が向っており、自分は今まで通りで何も変わろうとせず、ひたすらに相手を変えようとするのです。しかし責められる事によって相手が変わることはありません。という事は、あなたを救う道を相手の人は至らないその行動の中であなたに示し続け、教え続けてくれているのです。

ですから相手の中から自分の至らなさを見つけ出し、自



